

生田花朝資料調査についての報告書

大阪新美術館建設準備室 外部研修生

豊田 郁

一、はじめに

大阪ゆかりの日本画家、生田花朝（1889-1978）は、生涯大阪の風物を描きつづけた女流画家として、画壇でも稀有な存在であったとされる。現在、花朝の作品は、大阪新美術館建設準備室、大阪府立中之島図書館、大阪城天守閣などに所蔵されているが、作品の全体については明らかになっていない。また研究も少なく、望月信成氏による画集『生田花朝女』（清文堂出版、昭和51年）、倉吉博物館による図録『楯彦・生田花朝女名作展』（昭和54年）が、花朝作品を知る数少ない手がかりとなっている。そのような中で、花朝の下絵や書簡は、下絵から完成作へと至る過程や、花朝の交友関係を明らかにし、作家研究をすすめる手掛かりとなる。

研修日程・内容

- 8月5日（金） 13:30～16:30 下絵調査1
- 8月10日（水） 9:00～12:00 下絵調査2
- 8月16日（火） 13:30～16:30 下絵調査3
- 8月18日（木） 13:30～16:30 書簡調査1
- 8月19日（金） 13:30～16:30 書簡調査2、下絵と作品の関連づけ

調査資料

生田花朝資料 下絵 102点 書簡 59点

調査目的・方法

この度の生田花朝資料調査の主要な目的は、花朝が手許に残していた自身の創作に関わる美術資料（下絵、書簡）を、作家研究に活用するため、初期調査および保存環境の整備を行うことである。

そのため、はじめに、資料の全体像を把握するため、資料の分類、整理とリスト化を行った。今回の研修では、下絵 102点、書簡 59点を対象とし、写真撮影、採取データの記録を行ったのち、資料の保存環境を整備した。また、画集、図録との照合を行い、下絵と作品の関連づけを行った。

1) 下絵の初期調査

- a. 採寸 b. 写真撮影（全体図、接写） c. 技法・内容の観察

2) 書簡の初期調査

a. 写真撮影（封筒表裏、便箋、付属物） b. 宛名、差出人、時期、形式の確認

下絵の初期調査は、採寸と写真撮影、実見に基づく技法・内容の観察を行った。未整理の状態であったため、サイズの大きな下絵から調査を行い、採取データの記録後、中性紙保存箱に保存した。

書簡の初期調査は、写真撮影と実見に基づく宛名・差出人・時期・書簡の形式の確認を行った。採取データの記録後、薄葉紙で包み保存用袋に分別して、まとめて中性紙保存箱に保存した。

二、資料調査

下絵調査

大阪新美術館建設準備室は花朝の下絵が数多く所蔵されている。下絵調査では、資料の全体像を把握し、保存環境を整備するため、未整理の下絵の中からサイズの大きいものを中心に、採寸と写真撮影を行い、技法や内容の観察を試みた。その結果、花朝にとって下絵とは、本画の構想を確立するための重要な役割があると確認するとともに、花朝の描写技術の高い能力をみることができた。

材質は絹、和紙、洋紙が確認でき、和紙による下絵の中には、厚くしっかりとした素材の紙で裏打ちした下絵も見られた。線描には、鉛筆による線描、筆に墨を用いる線描、両者の併用による線描が確認でき、線描に淡彩を施した下絵や、胡粉などを用い着色を施した下絵も見られた。鉛筆による線描の下絵は、着色を施していない下絵が多く、鉛筆による下絵の段階では構図や配置などを検討しており、最終的な構図が決定したあとに、筆に墨を用いた下絵を描き、最後に着色のイメージを膨らませていったと思われる。

線描は直線的で、線描の優美さよりも、人物を的確に描写し、生き活きとした風物の表現に重きを置いていたことが推測できる。また、色彩は明るく、空や海などに用いる青系統の色と、傘や神社の柱、衣服などに用いる赤系統の色、山や木、地面などに用いる緑系統の色といった三色を中心として彩色を施す下絵が多く見られた。下絵におけるこのような線描と色彩には、菅橋彦に倣い、大和絵を愛好した、花朝らしい特徴を見ることができた。

本研修最終日には、画集・図録に掲載された写真を基に、作品と下絵との関連づけを行った。望月信成氏による画集『生田花朝女』（清文堂出版、昭和51年）は、花朝の米寿の祝賀の一端として発刊された画集であるが、この画集に掲載された作品と関連づけられる下絵が確認できた作品として、『だいがく』『鑑真和尚来朝』『良宵』『浜街道』『難波の網ひき』『住吉御田植』『宵宮』『遅日』などが挙げられる。これらの作品と関連付けられた下絵は、完成作とサイズの近いものが多く、写生や小下絵で練った構想を、本画制作に入る前に、原寸大の画面に練る大下絵であったと考えられる。また、等間隔で縦横の線を引きマ

ス目を描いた下絵もあり、小下絵を大下絵へ写し取る方法として、小下絵にマス目を引き、それぞれのマス目を対応させながら描く方法を用いたことがうかがえた。

今回の資料調査で確認できた作品は、花朝の画業を代表する作品の下絵が中心であったと考えられる。しかし、画集には年代が掲載されていないことから、制作年を特定することはできなかった。また、住吉大社の御田植神事など、本画において、同じ画題で構図や装束の様相が異なる作品を描いている場合もあり、決定的な一致がない場合、どちらの作品の下絵なのか、もしくは別の作品の下絵であるのか、判別が難しい下絵もあった。

下絵に描かれた画題は、住吉大社や四天王寺などの行事祭礼、縁日での賑わいなど、花朝の特色とされる、浪花の人々を繊細な描写で扱う風俗画、子供たちをテーマにした風俗画が見られたほか、七福神、高砂などの縁起画、古代中世の日本や中国を題材とした下絵も確認できた。実見できた下絵から、花朝の作品の特徴を考えると、一人の人物を中心に据えて描くということが少なく、群像表現となっていること、祭りや縁日などを題材とした作品では、多くの人物、特に子供たちを組み合わせ、それぞれの生き活きとした姿を表現していることが確認できた。このような特徴は、完成作に通じる花朝の特質であるといえよう。

書簡調査

書簡調査では、資料の全体像を把握し、重要な書簡を発見し分別することを優先した。そのため、写真撮影と宛名、差出人、時期、形式の記録を行い、書簡の内容について精読は行わなかった。展覧会への出品を考慮し、師である菅楯彦との書簡、画家や俳人との関わりを示す書簡は重要な書簡とみなし分別した。その結果、楯彦のほか、日本画家池田遙邨、山口蓬春、中村貞以、俳人で南画家の直原玉晴らの名前を確認できた。これらの資料は、花朝と楯彦の関わりや、画家、俳人同士での交友関係を研究するうえで、重要な資料であると考えられる。

おわりに

今回の研修では、生田花朝の一次資料に触れ、資料の取り扱いと初期調査の方法を学ぶ貴重な機会を与えて頂いた。生田花朝は、生涯大阪の風物を描き、女流画家としても重要な画家であるが、その作品については全体が明らかになっておらず、実見する機会の少ない画家であることから、これまで実作品を鑑賞したことがなかった。本研修で下絵を実見し印象に残ったのは、子供に向けた花朝のあたたかな眼差しで、祭りの風景など思わず頬が緩むような可愛らしさがあった。住吉大社や四天王寺などの祭礼行事を題材とした作品では、花朝の優れた群像描写により、情景が生き活きと表現されており、懐かしい風景を見るような感覚になった。このような身近な親しみを感じさせる絵画は、当時の日本画壇において貴重であったのではないかと感じる。書簡調査では、整理を優先し内容の精読を行わなかったため、詳細は分からなかったが、師である楯彦との書簡の多さからは、師弟

の関わりの深さを感じられた。

また、基本的な学芸業務のひとつである作家に関する下絵と書簡の初期調査・整理を経験し、花朝の創作の過程を知るとともに、生きた人間としての花朝の姿が浮かび上がってくるような感覚を得た。作家の試行錯誤の跡を知ることで、一つの作品に対する自身の見方も変化することを実感している。学芸員の仕事について、そのような作家としての人生そのものを保存し後世に伝えていくという重要な役割を担っていることに改めて気づかされた。

今回の研修は、一次資料の取り扱いと資料調査の方法を学ぶとともに、一次資料のもつ価値を改めて感じ、また、作家の足跡を後世に残していくために美術館が担う重要な役割について考えるよい機会となったと思う。今回の経験を活かして、自身の研究についても、長期的な見通しから価値を考え、取り組んでいくようにしたい。

調書例①

生田花朝資料 下絵箱 2

2	祭・みこし (画集 36 浜街道)	鉛筆・墨・淡彩、紙	60.5×67 (外寸)	メクリ 上破れ	160810
---	----------------------	-----------	--------------	------------	--------

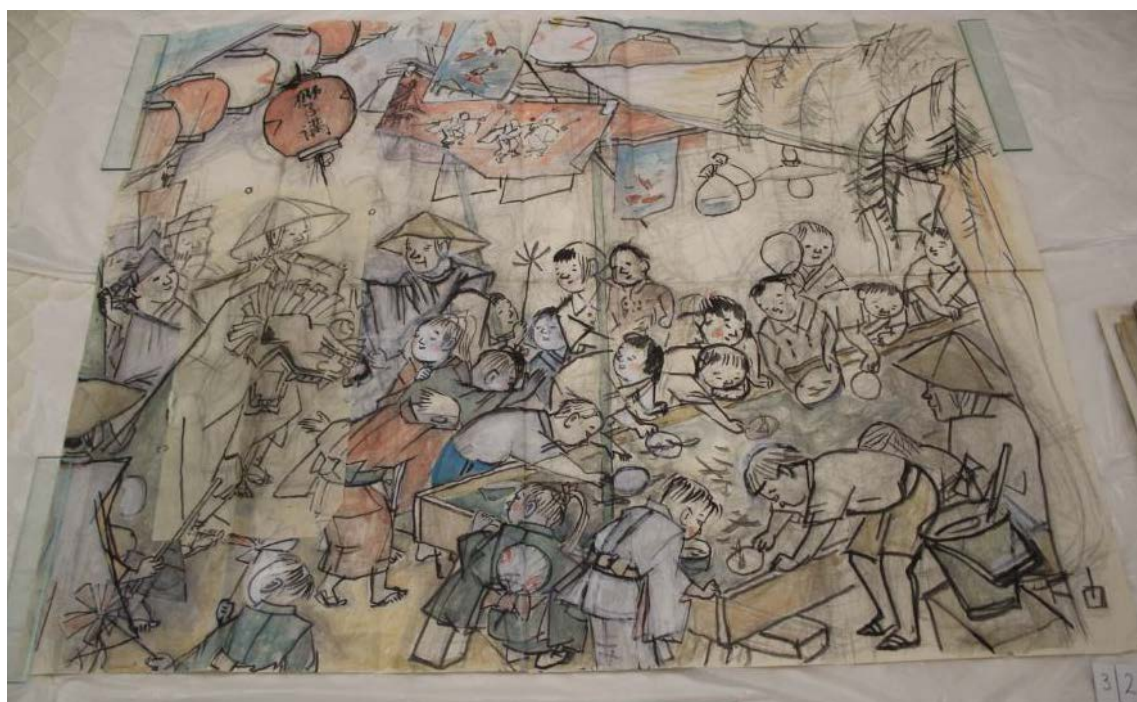


右下部分 みこしを担ぐ人物たち
画集 36 浜街道とは人物のポーズ、配置などに
違いがみられる。

調書例②

生田花朝資料 下絵箱 2

32	夏祭り 金魚すくい 洋服の子供 「獅子講」 (画集 52 宵宮)	鉛筆・墨・淡彩、 紙	109.5×143	メクリ 部分重ね貼り 洋紙か	160810
----	--	---------------	-----------	----------------------	--------



画集 52 宵宮とは画題、構図が共通するが、少年の衣服や子供たちの表情に違いがみられる。



左部分部分重ね貼り獅子舞と笛を吹く人物。



左部分 部分重ね貼りの下部分
獅子舞、笛を吹く人物の表情などに違いがみられる。